

南アルプス市立小笠原小学校学校関係者評価書

令和3年 9月21日(火)

学校関係者評価委員会作成

第一回 学校関係者評価委員会(書面開催)

方 法：書面開催(学校評価について文書にて提案し、ご意見を書面にて提出していただいた。)

評価者：学校関係者評価委員

名取 昇 (小笠原区自治会長, 学校評議員)
河野 広 (山寺区自治会長, 学校評議員)
齊藤 至 (元小笠原小学校校長, 学校評議員)
野中 雅子 (主任児童委員, 学校評議員)
島崎 進 (民生委員協議会会長, 学校評議員)
相原 千里 (元小笠原小学校校長, 学校評議員)
新津 岳 (元市教委教育部長・教育行政, 学校評議員)
新沼 有美 (PTA会長)
飯久保一男 (校長) 志村 征俊 (教頭) 有野 清美 (主幹教諭)

内 容

学校から書面提案の内容

- ①学校関係者評価の趣旨
- ②本年度の学校経営方針並びに現状
- ③学校評価の方法について
- ④評価の全体的な傾向について
- ⑤教職員自己評価シートの内容と結果について
- ⑥児童アンケートの内容と結果について
- ⑦保護者アンケートの内容と結果について
- ⑧1 学校評価から見られる成果や課題, ならびに改善策について

《学校関係者評価書》

I 学校関係者評価委員から出された主な意見

【全体評価について】

- ・ 評価項目の見直し, web での回答ができるようになったことは高く評価できる。
- ・ 全体を通して, 良好な水準であることがわかる。これからも評価事業を継続して, よりよい学校運営を図ることを期待する。
- ・ もう少し具体的なアンケート項目を今後の調査項目に検討したらどうか。
- ・ 少数意見の保障は, それぞれの立ち位置から全校課題「明日の登校が待ち遠しい」「豊かな学校の暮らし」の一層の前進のために欠かせないと思う。

【教職員自己評価について】

- ・ 先生方の自己評価が高いのは, 先生方が子どもたちとの関わり方や授業内容について等, 日頃から意識し, 努力されている結果だと思う。

- ・ 「地域に学び、地域に返す教育」を進めるために、学年・学級だよりを通じて保護者はもとより地域に共通認識を深める活動が重ねられている。家庭教育が困難な時代に、連絡帳や電話等の日常の取り組みと合わせ、児童と保護者の会話のきっかけづくりにもなっている。教師が、地域で学び、授業を創ること、保護者と携帯で児童の様子を「頑張っていますよ」と伝えるだけでも、担任の心を届けることはできると考える。
- ・ ICT化に苦慮しているようだが、単に機器を導入しただけでは意味がない。導入したICT機材をどうやって活用するか、これまでのやり方をどう変えるかが必要。それには、予算をかけて積極的な人材育成を教育委員会に提言すべきだと考える。
- ・ 危機管理の数値をどう考えるかだが、経営理念①の「安心安全な学校づくりの推進」は最重要事項だと思う。Aが100%でも事故等は防げないこともある。「早急に把握したい」と考えているのは良いことなので、児童のためにAが増えることを期待する。

【児童アンケートについて】

- ・ 「わたしは学校が楽しい」「わたしは、自分を大切にするように、他の人も大切にしている」の項目に少数だがC・Dと回答した子どもがいるのが気付きである。子どもたちが日々の生活・学習に向上心を持って取り組み、友人、家族、学校の先生方と信頼しあって暮らしていけるよう今後も見守っていきたい。
- ・ 「わたしは授業中に自分の考えを伝えている」の自己評価に授業の成立を見ることができ、ここからの前進が期待できる。平均点の2.9は低くはないし、何よりも「今自分はB」と評価したことに謙虚さと伸びしろが見える。
- ・ スマホ使用のマイナス面やゲームへの依存は一般的なこととして課題になっている。「携帯電話・スマートフォンを使うときのルール（やくそく）がある」の項目で「ない」と回答した児童と同様の質問項目に「ルールを決めていない」と回答した保護者の割合に20%近い開きがあることが気になる。意識の相違や解釈の問題なのだろうか。

【保護者アンケートについて】

- ・ 格差社会が進み、地域社会、家庭という社会が成立しない時代、保護者は「子どもの話をゆっくり聞いてやれない」「叱り方がわからない」ことになる。児童の実態把握の上に保護者への適切な語りかけが大切になっている。現在、学業連携は、保護者への学校、担任の支援があつて、成立できるのではないかとと思われる。
- ・ 評価がC以下の保護者は学校生活を不安に思っているのではないか？何らかの方法でこの不安を取り除くことに期待する。
- ・ 普段はあまり意識していないこともアンケートに答えることにより、子どもの生活や子どもとの関わり、学校について考える良い機会になっている。
- ・ 児童と保護者の意識の違いが見られる。様々な事情から我が子に目が届かない保護者の実情も垣間見ることができる。なお一層、学校と保護者の連携が望まれる。

【その他】

- ・ 児童のため、学校経営のため「こういうデータなので市は、保護者は、地域はこういう支援を、理解、協力、参画をしてほしい」というように、今後も学校の意図を明確にした自己評価書を作成してほしい。
- ・ 教育目標、具体目標は素晴らしいものだと考える。生物は「生き延びる」そのものが生きる目的だろうと考える。他人をコントロールすることは気分の良いもの。だからいじめは無くならない。

教え導く立場にあるものは、そういったマイナスの部分もしっかりと自覚しなければならないと思う。

II 今後の改善策・重点課題について

- 「主体的・対話的で深い学び」を各学級でどのようにして実現させていくか、教職員一人一人が課題意識をもって授業改善に取り組み、思考力・判断力・表現力の育成に努める。
 - ・「楽しくわかる授業」を目指して、校内研究を通して、教職員自ら学び合う。
 - ・あやめっ子タイムで培ってきたペアや小集団での学び合い活動を授業の中に取り入れる。
 - ・授業の中に「問題発見」や「問題解決」の過程を取り入れ、考える場面を仕組む。
 - ・子ども同士の意見交流の機会を設け、友だちの考えを理解する力を育てる。
 - ・「なぜそう思うのか」「どこからそう思うのか」を問う。
 - ・学校での授業と関連づいた家庭学習の課題を与えたり、保護者への家庭学習の啓発を行ったりすることにより、家庭学習の活性化を図る。

- 子どもたちの健全な育成のために、学校・家庭・地域住民・関係機関が今後も連携を継続する。
 - ・学校と保護者が連絡を密にとり、連携・協力して、一人一人の子どもの育ちに関わっていく。
 - ・学校だよりや学年だより、ホームページなどで学校の教育活動の様子や教育方針を積極的に発信し、保護者や地域の理解や協力が得られるようにする。
 - ・PTA活動・ボランティア活動、地域人材や施設の活用などいろいろな協力活動を通して学校と保護者・地域の距離を縮め、子どもの育ちを共に考えていく関係づくりを進める。